

「逆を考えること」

市場は需要と供給で成り立っているのは社会の授業で習っていることだと思います。就職事情で言えばいまは「売り手市場」といって、大幅な人手不足で就職をする側が有利な状況です。

かつての「就職氷河期」のように、採用がなく就職難の時代もありました。基本は需要と供給の関係ですからAIやロボットによってどのような市場になるのかは誰にもわかりません。

ただし予測では人口減少社会に入り、生産年齢人口と言われる「働く世代」が減り続けることから労働力は供給不足が続くと見られています。しかしどの職種も人手不足になるわけではなく、事務職は採用が無くなり、AIやロボットのエキスパートは大幅に人手不足になると言われています。

国は理系人材を増やすことを目標として、文系、理系の境をなくす文理融合や、文系、理系の比率を5割程度にしようと計画しているようです。それは正しい選択だと思います。

それでも文系人材に余剰が生じ、理系人材が100万人規模で不足するという情報が流れることで人々の不安がふくらみ、予測以上に理系に若者が集中する可能性もあります。そうなると理系の中で格差が生まれ、供給は不足するものの高収入の仕事はすぐに埋まってしまう、低所得の若者が増えてしまうかもしれません。

文系は余剰が出ると言われると文系人材は極端に減るかもしれません。将来文系人材が大幅に減るとしたとき、逆に「希少価値」が生まれるのも社会の真理です。

人間はコミュニケーションで生きる存在なので「ことば」を語ることや「文章」を書けることは需要がなくなるとは思えません。AIの画一的な文章だけに世界が独占されてしまうことは絶対にありえないと思います。

みんなと同じ方向を向く同調性が日本人の特徴ですが、あえて「逆」を考えてみるのが大事だと思います。有能な経営者は市場の空白地帯を敏感にキャッチして起業し、成功します。思いもよらない新しい発想よりも、どこに希少価値があるのかを見抜く目のほうが効果的なアイテムなのかもしれません。

流行を見定めながらも常に「逆」を考える癖をつけておくことは生き残る力の育成に大切な考え方ではないでしょうか。将来「希少価値」がでる場所や技術、商品は何だろう、常に先を見越して「逆」を考えてみましょう。